

一人一人が尊重され、学ぶこと・教えることが楽しい学校を取り戻すために

「日の丸・君が代」強制は憲法改悪の先取り。

暴走する教育行政をストップさせる判決を！

今、学校や教育に寄せる国民の関心は、イジメや体罰の問題に集中しています。この機に乗じて、安倍政権は道徳教育や教員の管理統制を強化しようとしています。規範意識を植え付ける手法でこの問題が解決するとは思えません。むしろ、周囲から期待される「自分」を演じ、演じきれなかった者は自らを嫌悪し、生徒や教員の精神的ストレスが増すことはあっても、減じることはないでしょう。

「日の丸・君が代」の強制に反対する私たちは、異質な者を排除する集団的圧力の怖さや、誇りが傷つけられる痛みを、身を以て体験しています。だからこそ、一人一人が尊重され、学ぶこと・教えることが楽しいと実感できる学校を取り戻したいと、心から願っています。

私たちの声に耳を傾けて下さい。そして、学校が人間の伸びやかな成長を応援する場となるように、私たちに力を貸して下さい。以下は、裁判所に提出した陳述書の一部です。

<「日の丸・君が代」の果たした役割を知って>

私は、小学校の頃日の丸や君が代を何も思うところなく注視したり、歌ったりしていました。運動会などでは国旗の掲揚がされていました。当時は、「日の丸・君が代」の役割を知らず、何も知らなければ悩むことも判断に困ることも無く、言われるままに従っていくことができました。しかし、歴史、とりわけ戦争の苦しみを味わった人々の振り絞るように話し綴る体験談を見聞きし、そこで果たした「日の丸・君が代」の役割を知るうちに、生身の人間としての個人よりも抽象的な象徴としての「歌・旗」を尊重することがどういうことなのかを考えるようになりました。

<「強制」は学校と相容れない>

「自由」を抑圧する国がいかにも悲惨な状況を国民に強いるか、過去の歴史をみても、現代の独裁者のいる国をみても明白なことです。処分まで伴った国旗、国歌「強制」はまるで全体主義国家です。こういう「強制」は学校という場とは相容れず、私は受け入れられません。100パーセントの実施など、恐ろしいことです。生徒に強制する事もしてはいけなし、できません。私は日本が本当にお互いを尊重できる、暮らしやすい国になってほしいのです。

<10.23通達による養護学校の卒業式の変質>

学校（養護学校：現特別支援学校）には沢山のトイレトレーニングをしている生徒がいます。おむつをはずせることがどれ程の生理的な快さ、また行動の広がりをもたらすか、想像してみてください。私の受け持ち児Cもそうでした。年単位で気長に取り組み、はずすことに成功しました。管理職も努力を知っているのです。それがCがトイレに行きたかった時がたまたま「君が代」の時であったからといってトイレに出ていけないようオムツをつける、とは何事でしょうか。また、全員が舞台「日の丸」に向かわされているため、頭部まで背もたれのある車イスの背で付き添っている教員にすら表情は全くみえず、医療的ケアetc.安全面で大きな問題があるのです。10.23通達による卒入学式は、根本的に子どもの活動をつぶし、人権をふみしめたのです。